

新たな
連携へ

他制度産学官連携人材との協働

大学と市役所の熱意で地域が活性化

キーワード：食品残さ・調味料・産業支援財団

本事例の関係者

鹿児島大学 教員
西之表市役所・T株式会社・財かごしま産業支援センター・工業技術センター・醤油醸造協同組合
文部科学省産学官連携コーディネーター

飛魚残さと廃糖蜜から飛魚醤油を商品化

【要約】

鹿児島大学は、西之表市役所から「飛魚の残さ」活用の依頼を受け、飛魚残さに廃糖蜜を加えた飛魚の魚醤油を開発し、市に技術移転した。

市では事業化する企業を公募し、飛魚残さの活用を検討していた地元企業を採択した。

当該企業は自力で実用化研究に取り組んだが、研究資金が必要になった。西之表市役所からコーディネーターのもとに、企業への研究助成資金についての相談があった。

コーディネーターは、財かごしま産業支援センターの競争的資金を紹介し、採択前、採択後の研究進捗をサポートし、商品化と事業化に至るまで支援した。

【きっかけ】

本学が文部科学省地域貢献特別支援事業「島嶼地域水圏資源環境開発管理事業」（平成15～17年）に採択されたのを契機に、本学と西之表市の相互協力関係の強化をはかっている。市の要請で、飛魚のすり身の製造工程で産出される残さを用いた、飛魚の魚醤油を開発し、平成19年1月にはその成果を市へ技術移転できた。市は、これを実用化する企業を公募・採択し、地元企業による実用化を開始した。企業は実用化に着手したものの、さらに資金が必要となった。これを知った市担当者より、コーディネーターは相談を受けた。

【段取り・プロセス】

コーディネーターは、財かごしま産業支援センターの公募資金を紹介、当該企業の応募申請書の作成を支援した。

財かごしま産業支援センターの産学官連携課は鹿児島大学の産学官連携推進機構内にあり、本学と地元企業とのマッチングを行っており、大学との連携は日常的に行っている。コーディネーターは産学官連携課の担当者と種子島を訪問し、実用化研究の段取りや進捗管理をはじめ、研究成果の製品化に向けて支援した。

実用化研究の段階では、大学以外に、工業技術センターや醤油醸造協同組合の協力も得られた。西之表市役所は、副市長・農林水産課・食生活改善推進委員等が市を上げて協力してくれた。

本学の教員と学生は、現地での技術指導や支援を行った。その際、地元が学生の滞在を支援してくれた。そのため、学生にとっては、あいさつや年配の人とのコミュニケーションの取り方など地域社会から学ぶ機会にもなった。

【成果・結果や活動後の変化】

本学から技術移転を受けて、水産加工食品会社と生コンクリート会社が共同で実用化研究を行ない、飛魚の魚醤油を製品化し、「飛魚の雫」として商品化した。飛魚の魚醤油は、従来捨てていた飛魚の加工残さとサトウキビの廃糖蜜を用い、魚臭さや塩辛さがなく、2週間で製造できる特長を有している。企業は商品化に成功したことから、新会社を創業し、新たな雇用も生み出した。

商品は、特産品協会の審査会で奨励賞に入賞し、高い評価が得られた。

その後、更なる魚臭さの低減化を検討して、飛魚残さにサツマイモと廃糖蜜を加えた新製品も開発されている。



(財)かごしま産業支援センター 産学官連携課

- ◆平成11年6月国立大学構内に財団が産学官連携課を設置（全国初）
- ◆産学官の研究開発を発掘から実用化まで支援

成功の事例

きめ細かな支援が成功につながった

●トピウオ魚醤油の商品化で会社設立

水産加工食品会社と生コンクリート会社は商品化に成功し、共同して新会社（T株式会社）を立ち上げ、新たな雇用も創出できた。

コーディネーターは、「飛魚の雫」を、特産品協会の「かごしま新商品コンクール」に出展することを勧め、その結果、奨励賞を受賞した。販売は、スーパー向けでなく、全国の百貨店で開催される物産展での対面販売を主に行っている。

また、コーディネーターは、鹿児島県内で開催された金融機関のアグリフェア展示会に、大学の社会貢献の成果品として出展し説明を行った。

●産業支援財団の産学官部門が大学内にあり、産学の共同研究を支援

地元企業や商工会等中小企業支援機関と連携している財団の産学官連携課が大学内にあることで、地域企業と大学の架け橋となり、有機的かつ緊密な情報交換を行っている。

コーディネーターは、財団の研究開発事業を紹介し、産学共同研究の応募から研究体制の段取りや進捗管理など、研究成果の製品化に向けて支援した。

新たなる 連携へ



(財)産業支援センター
産学官連携課

失敗の事例

地域ニーズの把握と支援策の広報が必要

●コーディネーターは、ニーズを早く把握するべきだった

日頃からの教員と企業との信頼関係に努め、ニーズの情報をいち早く捉え、コーディネートを早い段階から行うべきであった。

(財)かごしま産業支援センターは、地域企業への研究開発費補助事業を行っているが、その前段階として、研究会活動の支援を行っている。

研究会のメリットは、研究開発に入る前段階での事前調査や研究課題の絞り込みができることで、研究開発にスムーズに移行でき、研究成果が早期に得られる点あげられる。

●コーディネーターは、支援策をもっと広報活動するべきだった

コーディネーターは、国、県、支援財団等の中小企業支援策を知る機会が多く、企業の実情にあった支援策を提供できるので、地元企業はじめ関係者に支援策の情報が届くように、色々な機会を捉え、もっと広報活動するべきであった。

成功と失敗の 分かれ道

- ・ 地域企業の研究開発を成功させるには、トップのやる気と商品化までのきめ細かな支援が成功の決め手。
- ・ 良好な人間関係の構築が必要。

産学官連携の新たな展開に向けた提言

コーディネーター連携と教員の社会貢献評価

●コーディネーター同士の連携は大きな力となる

地域で活躍するコーディネーターはお互い顔見知りであり、お互いが情報を出し合って補完し合えば、地域企業支援の大きな力を発揮できる。

産学官連携の連結点となって活動している特許流通アドバイザー、科学技術コーディネーター、中小企業基盤整備機構の各支援マネージャー、産業支援財団のプロジェクトマネージャーなどの産学官連携人材の情報交換会が必要である。

●社会貢献する教員の評価が必要

教員の教育・研究活動に加え、社会貢献活動は、かなりの時間と努力を必要とする。産学官連携活動をはじめ社会貢献活動に取り組む教員は、地域社会からの期待も大きく頼りになる存在であるが、負担も大きい。教員のモチベーションを高めるためにも、社会貢献活動を支える評価システムが必要である。

☆コーディネーターの一言

地域企業へ大学シーズを技術移転する際、かなり具体的で細かい支援が必要な場合がある。大学と企業の間立った公設研究機関の支援が欠かせない。